C-39 足部動作と足部着用物について（吉野報告）

奈良大学 墨村 大 備永狼 小山 水生子 石山 和子

目的 前報のとおり、静止時および歩行時の接地面相を計測した結果、高年令になる程歩行時の足踏り接地面相が足部外側部に重ねるようがみられたので、更に補足となる基準線を加え、指間の開き状態と接地面相の移動伸長の状態を観察し、老人と青春の歩行を足型アリントリによって比較した。更に対象者がフジックスを着て日常生活における足部動作の状態を汚染部歯および度合によって比較し、検討した。

方法 対象者に60名、平均75歳を選び、第1報に提示した計測点を標準したフジックスアリントリ（ナイロン100％）を20日間、正常かは時間使用した。使用後の摩耗寸法、汚染部歯、溝数など比較した。使用器具は厚さ測定議、汚染度スケール、プログラミング。また対象者には作業時間、強度使用状態などを記録させ資料とした。

次に第2報の基準線に加え、足駄中心点から5、5、5指間中央点を結んだ線を補助線として、足型アリントリによって指間距離を測定した。

結果 第1指は各動作に対し年令別に差異なく、最高足跡動作の場合第2指に接近し歩行時は足部内側方向に移行する。第2指はフジックスを着て歩行時をみせ、低年令は動きが大きく歩行に移行する。第1指、指は高年令は階段動作。低年令で最高階上げの際手を指の動きがみえる。全体的にフジックスの動作に対しても足型を動かす。低年令では足型指の短縮、動作の難解化により足部外側または内側に変化するかがみられ、老人は指よりも足型指の不均一性をより多く歩く歩行が推奨され、フジックス汚染度歯にもこの状態がみられた。

C-40 着衣による姿勢の変化について（静岡大学教授 平沢正一郎 玉島大和 大阪女大附属 渡部春光 伊藤秀三郎）

目的 以前より私共は、かぜの姿勢に対する関心を懸けて居た。かぜの姿勢を知る知らし、ショルダーバック等の掛けさに依って変化する。そこで私共は、もっと基盤的つな面まで探って、更に着衣に依って姿勢が崩されるかどうかを、点検しようとする目的で、計測を若干試みた。

方法 姿勢の様相を見るために、私共は重心（Electrogranitograph）を指標にした。従って、その記録のためには、69型ビデオースコープとスタンオーディオヌレックスを使用した。被験者には、女子モデル（年令24才）を選んだ。

条件としては裸の場合と着衣、ワンピーススレパンダロン着用の場合、姿勢変化分析のため、被験者に（A）表面テスト、（B）片足テスト、（C）十字テスト、（D）回転運動テスト、（E）左右方向的テストを行わせた。

結果 裸の場合と着衣の場合とも動作の相違では、前者の方が正確であった。次に（A）より（C）までテストから判断すると、ワンピース、着衣及びパンダロンの順に出した。従って、（D）及（E）テストでは、必ずしも上記のようではなかった。

従って、結論私共は、姿勢が着衣に依って崩される可能性があることを知り、その点を客観的に追究するのに、重心図を用いるべきではないかと考察した。